

NO.612



L・NETワーカーズ通信

不幸の手紙からの脱却の方法 —ネットワーク型活動への転換を

西村美東士（徳島学遊塾運動アドバイザー、
徳島大学大学開放実践センター助教授）

「じきじきひまんじき徳島学遊塾運動」
は、まるで全体を学びひととして、市民の
たれもが学ぶことができ、教えること
ができる「共育システム」である。そ
して、その主体はつねに市民であり、
市民自らの発想と実践によって運営さ
れることが基本となる。学遊塾運営
本部や企画、広報等を担当する各専門
部会は、公募による市民ボランティア
が活動の中心となる。

もちろん、「これに対して、徳島市
事務局は社会教育課」はできる限り
の支援をしようとしている。しかし、
だからこそ、そこで問われるのは市民
参画の実体であり、官民パートナーシ
ップの成熟度である。

ぼくは徳島大学に赴任して以来、2
年間、本運動のアドバイザーをやらせ
てもらっている。これは、「よく自身に
とってもボランティアな活動である。
またまた「衆体」としての本運動を把
握しているとはいえない状況だが、ほ
んなじに「まるでの学遊塾が空き地につ
いてる段階の問題点として感じている点
を述べてみたい」。

それは、参加・参画する市民の側に
ややまとすると「不幸の手紙」と似た心
理的状況が垣間見られ、そのことが市
民参画や官民パートナーシップの阻害
要因になつてゐるのではないかという
ことである。「不幸の手紙」とは、同
じ内容の手紙をつきの人に回さないと
は、どこかの人に訴えて協力を得よ
うとしても、相手たつていやな苦労は
さうしないわけではない。不幸の手紙
をもつったときのようないや
な気持ちになるだけの非生産的な結果
しか残らない。

もちろん、「行政側にも」のような運
動への対処の未熟な部分も残ってい
ているとは思うが、市民の側に行政と
のパートナーシップ能力が培われれば、
それは市民の力で次第に解消され
よう。

なお、本稿は問題点とその対処法を
考察する」ことを主眼としており、実際
の学遊塾運動は、ほとんどの場面でま
さに「じきじきひまんじき」と運営され
ていて」とそれをためめ言明しておきた
い。

共育と豪華は、ある意味で「わがま
ま」（わがましいのあるがま）に積極
的に関与する行為であり、しかもそれ
は「自分のため」の行為であるといえ
よう。だが、徳島の人たけの「控え自
我」や「か、そういうふうな方がで
きず」にいる面がありそうだ。これはば
れて徳島の人たちの味わい深さを表し

ているのかもしれない。現に阿波踊り
のときなどは身も心も大いに解放し、
ハレの日を十分味わうことができる。
ぼくもさすがに、自分ひとりではな
く、とにかくみんなで身も心も大いに解放
する「アートランの三昧舞」（これもボラ
ンティア）のメロディー「じうぜいたくな
り」のものなどで、下手も上手もいって当
たり前にいっしょになり、地元の路地や
いつものなじみの盛り場や商店街を踊
り歩く」とができて、一番楽しかった。
しかし、日常の日々における「控え
自我」のほうは、それが何かの拍子に
潜行するような」とがあると、前述の
「不幸の手紙」のような非生産的状況
に陥る」といふことになる。「これがだけ自分
はやってきたのに」、ほかの人がやつて
くれないのはおかしい」「行政はいろ
いろ私たちに」そもそも面倒を見てほ
しくない」という気持にならなければ無理も
しない」とは思うが、これが市民の自
己決定活動といふ本質を歪ませ、市民
に陥る」といふことにはならない。
参考や官民パートナーシップを難しい
ものにしてしまつ。

ぼくは去年の2月に本運動の市民教
授研修会において、「さて困った、大人
への考え方」というワークショップを行
い、引き続き推進委員会研修会で討議
と懇親会をさせてもらった。

「あそでたまつたストレスを学遊塾
で発散して」という元気な意見も
あつたが、「役員をやつているとスト
レスがたまる」とが多い」という訴え
もあつた。その理由は、まわりの人が
協力してくれない、あるいはちゃんと

理解してくれていない、会議でなかなか全体の意見がまとまらない、などで高いため体がついていかないところもいた。市民教育登録者から

は、他県の例と同じく、講師としてお呼びがかかるなどという問題が大きかった。

一方、環境問題に関する活動をやっている人からは、「活動を、自分の生きてきた経験したと感じている」、民謡の人からは「徳島の宝を伝えるおせ話をしたい」などの意見もあった。このよう

うな「使命感としての生涯学習」という侧面も忘れてはならない。「しかし、それにも学遊塾運動が本質的に市民の自己活動である続けるために

は、「不幸の手紙状況」からはなんどしても脱却し、「使命感」にしても「潔い使命感」が求められていくといえます。

そのときぼくは次のよの「ロメント

1 教授法の実際の様子がわかる「市民教授リスト」

市民教授のさりなる活用にとっても、あまり聞くことがない人に講師を依頼するといふことがあるとしたら、それ自体が生涯学習運動としては好ましくない。ただの無機質なリストではなく、もっとその人の顔がわかり、メッセージや雰囲気が伝わり、どんな教え方をしてくれるのか、プログラムまでわかるリストが必要である。また、今後ますます重要な学校教育への協力については、専門の分野について

だけでなく、教育についての見識をもち、学校樹にもそれが伝わるリストに定活動の一環である限りはそういう活動にすることが大切である。

西、市民主体の生涯学習事業には、市民の独立型の生涯学習活動とは異なる独自の困難が見え隠れしている。「不幸の手紙状況」に陥る危険性が大きいのである。しかし、その状況からの脱却に向けた市民との行政の努力が、問題が精神構造にまで及ぶことによって大きく進むべきだ。つまり、「その困難に付ける役員」は必ずしも「会合に参加するメンバーはたれでも必ずしも参加でき、意見も述べられる」といふにしたがうか。来るものを抱き、去るものを放す、という自由で柔軟なネットワーク型の運営のための工夫が望まれる。

2 活躍場所の自己開拓

町内会、婦人会など地域はだれもが主人公になれる場である。また、市民教授同士でチームを組み、市側にいくつかの会場を提供してもらつて、自分たちでキャラバン隊のように「地域」を教えてまわるということも考えられる。

3 自己決定活動はグループ活動

ボランティア活動は、実際にはそのほとんどがグループ活動として行われるものなのではないか。そういう意味では、まずは市民教授や役員同士が日常的に教えあつたり学びあつたりするところが楽しいと思う。

4 自分のための活動

いつたん役員を引き受けたのになれば、責任を持って会合にも出席すべき」という感覚はそれが自分自身に向かっている限りは故意に偏すると思つ。しかし、「責任感ば」と、それに沿けば被迫される。だから仲間と一緒に役員自身が学べる、おしゃべりできる、たかの会は楽し」といふのは「自分のため」という感覚それが大切なではないか。欠席した人「もっと責任をもつて出席して」ではなく、「こ

徳島学遊塾運動のような行政が支援する、あるいは行政が仕掛ける市民参

[REFERENCES]

———. (西村、英東十) ③徳島大学文学部附属研究センター
<http://www.sakkyoukan.u-tokyo.ac.jp/mbo/>